

# 南冥の東ティモールの大学にて

石田博樹 (長岡工業高等専門学校)

こんな形で、わずか一ヶ月で仕事が中断させられてしまうとは思わなかった。あの東ティモール大学工学部の学生達は、そして、工学部のあの先生達は、今どうしているだろうか。2006年5月末の夜に、治安の悪化により、首都ディリの空港から私たち日本人約40名が緊急脱出し、深夜にジャカルタの空港に着いたことが今でも思い浮かんでくる。

大学の執務室には、あれこれの教材やテキストを残したままだ。東ティモール大学工学部の設立と教育環境の整備のための3年プロジェクトは4月に始まったばかりだ。人懐っこい笑顔の学生や先生達と別れの言葉を交わす余裕も無く、緊急退去の指示に従って、突然に出国してきたことも大きな心残りだ。

日本から約7時間の飛行で、インドネシアの首都ジャカルタに着く(途中、密林と赤茶けた色の川を眼下に見てボルネオ島の上空を縦断する)。さらに乗り継いで、夜にバリ島の Denpasar 空港に着くと、まだ4月とはいえ、日本人にはムツとくるかなりの蒸し暑さだ。翌朝、ニワトリの声と小鳥の鳴き声で目を覚まし、ホテルの部屋の窓を開けると、そこはまさしくココナツヤシの木々と青い空が広がる南国の光景である。朝食を済ませて空港へ行き、出国の手続きをし、飛行機に乗り込む。小スンダ列島と太陽の光をきらきらと反射させているその周囲の海面を眼下に見つつ、ほぼ真東へ、およそ2時間の飛行で東ティモールの人口約12万人の首都ディリ市に着く。



南緯9度にあるディリ市の気候は、季節の変化がないようだ。この時期は、乾季に入りつつあるせいか、毎日30~32度くらいの日中気温だが、湿度がかなり低いために、日本よりは、蒸し暑さを感じない。

いつも朝5時頃には空が明るくなり、夕方6時半頃には、市内が真っ暗になる。電力供給が不十分なせいか、ネオンの輝く繁華街というものがない。道路の交差点でも交通信号はない。市内の道路では、犬、豚、ニワトリが自由に歩いている。道路の真ん中で、堂々とフンをしている犬もいる。行き交う車の前を豚の親子がゆっくりと横切ることもある。ニワトリの親子連れが道端を歩いているのを見ると猫に襲われないかと、心配になってくる。しかし、現地の人々は、それらを気にも留めていない。まさしく南国における共存の生活である。外出する人々の多くはビーチサンダルを履いている。上半身裸で裸足の子供達も多い。



東ティモールでは、1999年8月に、独立の是非を問う国民直接投票の結果、独立が選択されたが、その結果をめぐって、大きな国内騒乱が発生した。その後、多国籍軍の支援により、ようやく、2002年5月に21世紀の最初の独立国として人口約80万人の東ティモール民主共和国が誕生した。だが、その騒乱による国内の社会基盤の大破壊や技術者の喪失などのツメ跡が極めて大きく、東ティモールは、自力では到底、立ち直れる状態ではない。

それに対して、日本政府としては、社会経済基盤の整備、農業の発展、人材育成という3分野を重点的支援分野とした。JICA（国際協力機構）によるこれらのプロジェクトの中で、2002年より、東ティモール大学工学部の設立のために、日本の大学の工学部教員により、機械工学、電気工学、土木工学の3分野で本格的な支援の調査活動が開始され、それをもとに、2006年4月より、工学部設立のための3年計画のプロジェクトが開始された。JICAの熱心な専門員二人と私からなる今回の3人チームの主な仕事は、大学としてのシステム造りと、工学部教員の養成と、そのための教員に対する数学と物理学の基礎教育である。



工学部のキャンパスは、ディリ市内から約12km離れた山間部のヘラ地区にある。ディリ市内もヘラのキャンパスも、今日では有名な無料の地球閲覧ソフトであるGoogle Earthにより、上空からきわめて鮮明に見ることが出来る。400名以上の学生も、約50名の教員もスクールバスで市内から通ってくるが、往復1,2ドルの交通費の負担でさえ重荷なようだ。



東ティモールにおける通貨はUSドルである。主にシンガポール、マレーシア、インドネシアから来ている中国系の商人が経営するスーパーや電器店では、日常生活に必要な食品や一通りの電化製品を購入できる。中華料理店もいくつかある。

しかし、国民一人当たりのGDPが400ドルにも満たない社会にしては、インドネシアやフィリピンに比べて驚くほど物価が高い。東南アジア諸国に比べて、どの商品も数倍の物価である。どのスーパーや電器店も、到底、現地の人々が気軽に食事や買い物に行ける店ではない。そもそも、現地の人々を対象とした商売ではなく、国連関係者や現地に駐在する外国人を客としているように思えた。この東ティモールが真に独立国となり、国連関係者や駐留外国人が減少した時には、あの多くの店は経営が維持できるのだろうか、と疑問に思えた。

一方、ときどき市内の広場で開かれている露天市場には、たくさんの現地の人々が集まり、野菜や衣料品が並べられている。その市場を歩いていると、私には日本の朝市が思い出された。露天市場にて現地の人々が話している言葉は、私には、もちろんまったく分からない。





およそ 400 年間もポルトガルの植民地であったせいか、人の名前にはポルトガル系の名前が多い。「独立」して以来、東ティモール政府は、公用言語をポルトガル語とテトゥン語とした。しかし、ディリ市と周辺の普通の人々にとっては、テトゥン語やインドネシア語が日常語であり、ポルトガル語を理解するのは、かなりの年配に属する人が、教育レベルの高い人のみのようだ。市内のホテルやレストランでは、簡単な英語であれば通じるが、大学教員でも英語やポルトガル語を十分に使える人は少ない。



私は、毎日の午前中の数学と物理の授業を英語で行なっていたが、受講者の教員の中に英語が理解できない方も含まれているので、図やグラフそして数式という「世界共通語」をふんだんに使った。



政治や科学技術に関する今日の世界のいろいろな情報、設備機器の使用説明書や教材、テキストなどが、全て世界の共通語である英語版であることを考慮すると、今後の東ティモールの社会開発と教育環境の整備のためには、英語を公用言語としたほうが良いと思われる。実際、その方が、日本を含む諸外国にとって、東ティモールを支援しやすいのである。

ディリの空港からオーストラリアのダーウィンまで、わずか一時間半程度の飛行で行ける。ディリには広大な敷地を持つアメリカやオーストラリアの大使館がある。英語国との繋がりが強いのである。ポルトガル語を公用言語とすることの利便性は少ないように思う。

毎朝、ヘラ地区の工学部キャンパスに着くと、私はまず最初に、電源の状態を確認した。通電していることが分かると、一安心したものである。しかし、日中でも、停電が突然に、そして、しばしば起きる。その度に、教室の照明、エアコン、使用中のコンピュータ、などが停止する。構内にある一台のディーゼル発電機がまもなく作動して仕事の中断を最小限にとどめてくれる場合もあるが、その発電機の燃料（軽油）の代金の支払いも日本（JICA）に依存することがあり、大学としての機能の自立は、当分先のことと思えた。発電機が作動しないまま、夕方になってしまうこともある。

熱帯の気候に慣れていない通常の日本人には、エアコンの効いていない部屋での長時間の仕事は無理であろう。人一倍、暑さが苦手な私は（しかし、雪国育ちの私は寒さにはかなり強い）、授業中はいつも汗だくになっていたが、学生や教員の方々がそれほど汗をかいていないのを見ると、やはり人種の違いかな、と思えてきた。現地の人々は、そこで生まれ育っていることから、エアコンなど無い生活が普通なようだ。

最初は順調に続けられると思えた、この工学部の設立の3年計画プロジェクトは、しかし、首都の治安の悪化と政府機構の不安定化により思わぬ展開となり、中断してしまった。

国民投票により、形の上では、一応、「独立」してはみたものの、独立に賛成した主に東部出身の人々と、独立に反対した主に西部出身の

人々との間には、騒乱の火種がいまだに根強く残っており、政府も対応に苦慮している。

加えて、一般庶民の生活の中に、テレビ、ラジオ、新聞という通常のコミュニケーション手段が普及していないために、不穏な噂があると、人づてにそれが増幅されて伝わり、一層、治安が悪くなる。ディリ市周辺にいる多くの人々は、家財道具とともに、我先にと故郷や山間部へ脱出することになる。つい4、5年前の内戦における恐怖の記憶が、一般庶民の中に色濃く残っているのであろう。



ディリ市周辺の治安が悪くなっているとの噂があるたびに、工学部キャンパスは、学生も教員も来ないもぬけの殻となる。私達が、朝にキャンパスに行っても、誰もいないために仕事にならなかったこともある。

5月の3、4日にあった不穏な噂による人々の集団脱出はまもなく終息したが、23日頃から始まったディリ市内での騒乱は長引きそうな気配であった。ホテルにいても銃声ははっきりと聞こえた。ホテルの従業員からは「外出しないように」と忠告された。

5月25日の夕方、JICAにより、ついに私達日本人にも東ティモールからの緊急脱出の指示が出た。翌26日の夜、私達日本人はディリの空港を後に出国し、インドネシアのジャカル



タへ向かった。

日本としては、開始されたばかりの東ティモール大学工学部設立の3年計画プロジェクトを、このまま消滅させるわけには行かない。



毎朝、「Bon Dia!」と声をかけると、皆が「Bon Dia!」と返してくる。人懐っこい素敵な笑顔を見せる東ティモールの人々、そして工学部キャンパスの学生達や教員たちが、今も思い出される。東ティモールの治安がようやく回復しつつある今日、このプロジェクトの再開を私は願ってやまない。

(2006年9月)